フランスの1·11は9·11後を反復しない

三浦 信孝

バリバールの「三つの言葉」

1月11日、パリのレピュブリック広場からナシオン広場まで、130万人近いシャルリたちがテロの犠牲者を悼み、表現の自由を守るため行進したという。フランスの共和国理念に共鳴し共和主義者を自任してきた者として、私も現地にいれば当然、パリ解放以来という大規模な「共和国大行進」の列に加わっていただろう。しかしなぜかパリは遠く感じられ、日本から《私はシャルリ》のメッセージを送る気にはなれなかった。

私は12日に京都大学で行われる政治哲学者エチエンヌ·バリバールの講演を聴くため、前日京都入りし、長いあいだ宿題だった故·西川長夫の遺影にお線香をあげにお宅を訪ねた。前回バリバールが日本に来たのは2002年の秋で、西川長夫はアルチュセールの兄弟弟子への連帯感から、立命館大学でのバリバール講演「暴力とグローバリゼーション」の討論者をつとめていた。

したがって、今回の事件について私が最初に話を聴いたフランスの知識人は、もっとも話を聴きたいと思っていたバリバールであり、12日の京大講演では、1月10日付のリベラシオン紙にのった論考「死者たちと生者たちのための三つの言葉」が松葉祥一訳で紹介された。三つの言葉とは「共同体」、「不用心」、「聖戦（ジハード）」の三つである。

第1に、われわれに必要なのは「ユニオン·ナショナル」ではなく「共同体」である。社会的危機のスケープゴートにされがちな移民を排除せず、右翼の国民戦線支持に流れた労働者やウエルベックの小説の愛読者をも排除しない、喪と連帯と反省的考察のための、開かれた「共同体」である。「ユニオン·ナショナル」は、具合の悪い国内問題に蓋をして、フランスがマリやイラクでイスラム過激派制圧のため行ってきた空爆を正当化し、国民をさらなる対テロ戦争に動員する危険な論理である。「グローバル規模の内戦」に対抗するために必要なのは、「フロン·ナショナル」の向こうを張る「ユニオン·ナショナル」ではなく、内と外の国境を越えたコスポリティックな「共同体」でなければならない。

第2に、シャルリ·エブド紙の漫画家たちは、危険を軽視しあえてリスクを負う冒険心と一種のヒロイズム、それに挑発的風刺の結果起こりうる重大な事態に対する無関心、という二重の意味で、「不用心」だった。その結果、彼らは命を落とし、表現の自由は危機に瀕している。人間の命と表現の自由の両方を守るより賢明な方途を探さなければならない。

第3に、われわれの運命はイスラーム教徒とともにある以上、「聖戦」の意味を精査しなければならない。コーランには人を殺せとはどこにも書いていない。「聖戦」はイスラームの教えとは無縁である。今回のテロによって「ムスリム＝ジハーディスト」というアマルガムが大衆に刷り込まれたとすれば、テロの最大

の犠牲者はムスリム自身である。烙印を押されて差別され、屈辱をあじわっている移民の若者たちは、ジハーディストの誘惑に引き込まれやすい。「ムスリム＝ジハーディスト」のアマルガムを断ち切る理論的努力は、イスラーム教徒を含む「われわれ」の共通の責務である。イスラーム教徒を孤立化させてはならない。テロを防ぐには、テロを利用してますます軍事化する国家が、治安対策を強化するだけでは不十分だ。

この論考はバリバールが7日の襲撃のおそらく翌日に書いたもので、9日に起こったヴァンセンヌ地区のユダヤ系食材スーパーでの殺傷事件には言及がない。したがって、12日の京大での討論会では、「テロの最大の犠牲者はムスリム自身」という発言を大幅に修正している。

9·11や3·11に匹敵、しかし……

1月7日にはじまる一連のテロは、犠牲者の数や事件の性格こそ違え、まぎれもなく2001年ニューヨークの9·11や2011年に東日本を襲った3·11の大震災に匹敵する、21世紀世界の大事件である。ただし私は、パリのテロ事件とは初発の出会いで遅れをとった。

2001年の9·11のときは、パリから帰って家でテレビをつけたら、いきなりツインタワーに飛行機が激突し、空高く煙をあげてタワーが崩落する様が映し出された。しかし何が起こったのかわからない。いや、これは事故ではなく自爆テロだ。パリで事件を伝えるラジオの第一声は「カミカーズ！」だったと聞く。

2011年の3·11のときは、やはりパリの宿でテレビをつけたら、三陸に大津波が押し寄せ、あっという間に家々や車を押し流す様をみて、息をのんだ。私が子供のころ一時住んだ宮古や釜石も、濁流に飲み込まれたに違いない。翌日の昼便で帰国し13日の朝成田に着いたら、新聞が一面大見出しで前日の福島第一1号機の水素爆発を報じている。原発が爆発と聞いて不安にならないはずはない。成田からリムジンバスで都心に向かったが、地震後の東京はひっそりして人影はなく、まるで死の街に入っていくようだった。

ところが2015年の暗い幕開けとなったパリ·テロ事件は、ニュースに接するのが24時間以上遅れたうえに、現地の生々しい映像を見ていないため、エモーショナルなレベルでのインパクトは弱かった。

1月8日の夕方、私は20年勤めた中央大学文学部での最終講義を終え、一部の同僚や友人、学生に退職を祝ってもらった。 講義の演題は「ヴァレリーからルソーへ、文学と政治哲学のあいだ」とし、話すことは全部原稿をつくり、前日は配布資料をコピーするため大学に遅くまで残った。8日は朝から通常の授業もあったので、朝刊も読まず、パリで前日に大変な事件があったのを知ったのは夜遅く帰宅してからである。不思議なことに衝撃はなかった。 不謹慎だが、ついに来るものが来てしまった、というのが偽らざる感慨である。

ただし、講義の参考資料に「フランス語を通して学んだ批判精神はフランスにも向けられる」として、朝日の2010年6月

10日付夕刊に寄稿した「偉大さ失った共和国　仏にブルカ禁止の動き」を加えたことを悔やんだ。

記事の内容はこうである。共和国の理想と現実のあいだの乖離は2007年のサルコジ政権の誕生でひとつの臨界点に達した。フランス革命以来「左」が闘いとってきた共和国的価値を「右」が詐称して、「国民」と「移民」を対立させ、移民を排斥する方向で「ナショナル・アイデンティティ」のキャンペーンを上から組織したサルコジのフランスを、私は「偉大さを失った共和国」と評して批判した。

その記事を、前日パリで惨劇があったとはつゆ知らず、犠牲者に哀悼の意を表することもなく配った不適切さを恥じたのである。

共和主義知識人の右旋回

1989年秋に起こったイスラーム・スカーフ事件で、私ははじめて共和国のライシテ（非宗教性）原理の重要性に気づかされ、以来フランスの移民問題には注意を払ってきた。しかし、公立学校でのスカーフ着用を禁じた2004年の「ライシテ法」では不十分とばかりに、2009年にブルカ禁止の動きが高まると、私には、国教だったカトリックの独占支配に抗して信教の自由を保障する宗教共存の原理だったはずのライシテが、イスラーム系移民排除の原理に転化し悪用されているとしか思えなくなった。

その背後には、1989年秋の有名なアピール「教師たちよ、怖れるな！」に署名したレジス・ドゥブレ以下5人の共和主義知識人、もっとはっきり言えばユダヤ系共和主義知識人の保守化と反イスラーム化がある。

最近アカデミー・フランセーズ入りしたアラン・フィンケルクロートは、すでに2005年11月のパリ「郊外暴動」のとき、これを「共和国に対する民族的・宗教的ポグロム」と形容し、普遍主義の仮面をかなぐり捨てていた。

ポグロムとはユダヤ人に対する組織的な略奪や虐殺を意味するロシア語で、20世紀初頭からロシアを中心に頻発したユダヤ人迫害に起源があり、のちにナチスによるユダヤ人虐殺もさすようになった。

フィンケルクロートは、郊外暴動を黒人とアラブ人のイスラーム系移民による共和国に対するポグロムと呼ぶことで、ユダヤ系の地金をあらわにし、そのイスラモフォビア（イスラーム嫌悪）を公言したのである。

1989年秋のアピールに署名したもう一人エリザベート・バダンテールは、パリテ法に反対したことで知られる、普遍主義フェミニストである。2009年にサルコジが「ブルカは女性の隷従の表徴であり、フランス共和国の領土内では歓迎されない」として大統領みずからブルカ禁止法の音頭をとると、それに呼応するように「ブルカを自発的に着用する女性たちへのアドレス」を発表し、せっかく男女平等を実現したフランスに住みながら、そんなにブルカを着用したいなら、一夫多妻制のもとで女性が虐げられるサウジアラビアやアフガニスタンに帰ったらどうかと呼びかけ、物議をかもした。

バダンテールは最近「開かれたライシ

テ」論を批判して、ライシテは一つしかなく、マリーヌ・ルペンがもっともよくライシテの何たるかを理解していると発言しているから、「ライシテ原理主義者」と呼ばれても仕方がない。

1990年代の終わりから人々の精神の「ルペニザシオン（ルペン化）」が語られるようになったが、それとパラレルに、共和国の普遍的価値を掲げる一部のユダヤ系知識人の保守化・右傾化に私は注目してきた。

「一部のユダヤ系知識人」と言ったのは、フィンケルクロートの郊外暴動でのポグロム発言をもっとも厳しく批判した多文化主義の社会学者ミシェル・ヴィヴィオルカも、逆に『移民の運命』で「同化」をこそ移民統合の共和国モデルとして擁護した歴史人類学者のエマニュエル・トッドも、共にユダヤ系だからである。

なぜ《私はシャルリ》ではないか

「仏連続テロ1か月」後の2月6日、日経新聞はトッドのインタビュー記事「移民疎外　過激派生む」を掲載した。この記事は、1月12日付読売新聞の電話インタビュー以来、国内では孤立して発言を控えてきたトッドがふたたび日本のメディアに打ち明けたもので、冒頭に紹介したバリバールと重なる議論をよりストレートな物言いで語っており、私は大いに共感した。

トッド曰く、「私は事件前からシャルリ・エブドの風刺画を強く軽蔑していた。預言者ムハンマドのわいせつな風刺画を出版した新聞の神聖化には同意できない」、「フランスでは宗教の冒瀆と受け取られる表現でも権利として認められる。しかしキリスト教など自分たちや祖先の宗教を皮肉ることと、イスラームのようなほかの人たちの宗教を侮辱することは違う話だ。イスラームは郊外に住む職のない移民の心のよりどころになっている。イスラームを冒瀆することは、こうした移民のような社会の弱者を辱めることだ」（一部改訳）。

私も《私はシャルリ》とは言えない。それは郊外の学校に「私はシャルリではない」と小声で叫ぶ生徒たちがいるからだ。シャルリ・エブドの前身『アラキリ』を見たことがあるが、際物（きわもの）の新左翼系風刺新聞で、日本語を茶化してタイトルにするのはいかがなものかと思った。私はイスラーム過激派の自爆テロをカミカゼと呼ぶ間違いを指摘し、神風特攻隊の悲劇を説明するエッセイをフランス語で書いて講演したことがある。Harakiri も Kamikaze も、正確な知識にもとづかず、否定的なイメージで日本語を転用する悪しき翻訳の例である。

2012年にフランス2のバラエティ番組で、サッカーのフランス代表と対戦した日本チームのゴールキーパーに腕が4本ある合成写真を映し、司会者が「フクシマの〔放射能の〕影響か」と茶化して視聴者の笑いを誘ったことがある。福島の被災者が観たら心が傷つくだろう。フランス的諧謔精神も度を越すと文化の異なる人には通じず、顰蹙をかう例である。

ローマ法王フランシスコは1月15日、シャルリ・エブド事件をめぐり、「他者の信仰をもてあそんではならない」と述

べ、表現の自由にも一定の限度があるとの考えを示した。法王は、表現の自由は市民の基本的な権利であると強調し、神の名によって人を殺すのは常軌を逸しており、決して正当化できないと述べた。その一方で宗教をからかう者は挑発者だと指摘、他者の信仰を侮辱したり、からかったりしてはならないと語った（共同通信）。

1月11日の「共和国大行進」でフランスは真の「ユニテ・ナショナル」を回復しただろうか。

1月13日ヴァルス首相は国民議会で「フランスはテロとの戦争に入った」と宣言して喝采を浴び、1918年以来はじめて議員総立ちでマルセイエーズを唱和したという。私ははからずも、1914年7月31日に反戦平和を訴えるジャン・ジョレスが右翼の凶弾に倒れた数日後、右も左も「ユニオン・サクレ（神聖連合）」に糾合され、ポアンカレ首相がドイツに宣戦布告した過去を想い出した。

しかし、フランスの1・11は、2001年の9・11でアメリカが対テロ報復戦争に踏み出した歴史的愚挙を反復することはないだろう。フランスにも、9・11後のアメリカのように、非常時に個人の自由を制限する「パトリオット・アクト（愛国者法）」をつくろうという主張があった。私としては、パトリオット・アクトなき批判的パトリオティズムをフランスに期待したい。そのパトリオティズムは、普遍主義のナショナリズムを超えた、コスモポリティックなパトリオティズムでなければならない。

みうら・のぶたか　1945年生まれ。フランス文学・思想。中央大学教授。主著『現代フランスを読む――共和国・多文化主義・クレオール』、編著に『普遍性か差異か――共和主義の臨界、フランス』、『来るべき〈民主主義〉――反グローバリズムの政治哲学』、共著に『思想としての〈共和国〉』、『〈共和国〉はグローバル化を超えられるか』、共訳書にジャン・ボベロ『フランスにおけるライシテの歴史』など。